

大阪ステーションの音楽教育史

——アメリカン・ボード日本ミッション音楽教育史 その三——

安 田 寛

一 梅花女学校の創立とカーチス夫人

ゴードン宣教師は一八七四年一月八日付の書簡で、ギューリック夫人が学校で何人が教えている、彼女は一緒に住んでいるミス・グールドイと一緒に数人の婦人を担当している、ゴードン夫人は七名の子どもを担当していて、そのほとんどは女子です、と述べた後、これがこの女性にとってよいことの始まりであることを望んでいる、と結んだ。⁽¹⁾ 宣教師夫人やミス・グールドイの女子教育への努力が梅花女学校の創立へと結実しようとしていた。

一八七八年一月七日、小泉教夫妻、成瀬仁蔵、ステイブンス、グールドイ、フィラーらの協力によって、土佐堀裏町十番地の長田作五郎の日本家屋で梅花女学校開校式がおこなわれた。最初の生徒は十五名であった。⁽²⁾

梅花女学校で音楽を担当したのはカーチス夫人であった。一八八〇年のものと思われる一〇月一六日付のグールドイ書簡は、「昨年、ミス・コルビーが中国でジェンクス夫妻の世話をしたとき、学校では、カーチス夫人が、音楽を教える彼女自身の仕事のかたわら、コルビーのクラスも担当した」と伝えている。⁽³⁾

一八七八年夏、有馬で、夫人は同志社の学生だった本間重慶に歌唱を教えた。最初、ドーン宣教師から音楽の手ほどきを受けた彼は、秋に同志社を去り、彦根伝道に赴いた。一〇月一九日付のスタークウエザー書簡には、彼が、彦根で毎日午後、子どもに音楽を教えていることが書かれている。⁽⁴⁾翌年の七月、彦根にやってきたカーチスを出迎えた本間は、夫人が一緒でなかったことがっかりした、とカーチスは述べている。⁽⁵⁾

カーチス宣教師は、一八七九年一月二日付の書簡で、「わたしたちは教育方面で少し役に立っています。わたしたちの出席は役に立ち、歌唱を導く私たちの声はたしかに必要なものです。そして、折々の助言の言葉も役だっているようです。カーチス夫人は女学校で音楽を（また地理のクラスも持っていると思います）教えています」と説明している。⁽⁶⁾

三月の終わるか四月のはじめに行われた大阪英語学校の卒業式に宣教師たちが招待された。その機会に、カーチス夫人は器楽曲を数曲を演奏し、四重唱に参加した。⁽⁷⁾

一八八〇年七月三〇日付の手紙でカーチスは、妻は深刻に神経痛で苦しんでいるが、きっと回復するでしょう、と述べた。⁽⁸⁾彼の望みにもかかわらず、夫人は、一〇月一二日に帰らぬ人となった。⁽⁹⁾夫人の逝去についてF・A・ガーディナー宣教師は、カーチス夫人の死は大変な損失である、彼女は美声に恵まれていた、その点で彼女ほど役立つ人はステーションにはいない、とステーションの人々の安らぎであった彼女の音楽を失った悲しみを述べた。⁽¹⁰⁾カーチス宣教師は妻について、「彼女は歌の天分によって、すべての伝道区に、そしてまた近隣の地域に、広く人氣がありました。それから、友を必要としているように見えるすべての人の友となるといふ性向によって、よき影響を及ぼしてまおりました」（若山晴子訳）と述べた。⁽¹¹⁾

二 オルチン宣教師の来日

カーチス夫人亡き後、梅花女学校で音楽を教えていたのは、ミス・A・M・コルビーであったようである。⁽¹²⁾ カーチスは、浪花教会牧師の沢山保羅、梅花女学校で習字を教えていた酒井貞躬の助力を得て、八二年三月に『讚美歌并楽譜』という表題が示すとおり、日本で最初に五線譜楽譜を本格的に使用した讚美歌集を出版した。その完成の喜びを伝える書簡の中で、カーチスは、「私どもは、毎週いくつかの教会で歌い方を教授すべく集会を持つことを目論んでおります。多数の人びとが切に習いたがっています。オルチン氏に、当地で手伝ってほしいものであります」、と述べ、オルチンの来日は時宜に適っており、音楽家としての彼の才能はいい仕事をするだろうと、来日後のオルチンを評価するようになる。⁽¹⁴⁾ それに対して、クラーク書記は、「私はオルチン氏が大阪に配属されることは大変結構と思います。〔略〕私は、貴君がオルチン氏を扶活でまじめな人物として氣に在るであろうと確信しております」と伝えた。⁽¹⁵⁾

一八八二年一月一二日にオルチン宣教師は神戸に着いた。⁽¹⁶⁾ この後、一九一九年に引退して帰米するまで、讚美歌集の編纂と歌唱指導に貢献することになる。⁽¹⁷⁾

一九三〇年六月五日に、「宣教師として日本でずっと仕事をするために再び日本へ戻るとしたら、何をしたいと思えますか」というインタビューにオルチンは次のように答えている。

〔前略〕この歳でも私は教会音楽をします。日本ではそれがまだ必要だからです。日本人は一般に音楽的ではありません。しかし、何人かはいろんな方面ですばらしく進歩しました。でも、音楽伝道、独唱にはまだすばらしい仕事が残っています。私もそれほど歳でもありません。ニューヨークの教会や他の日本人教会に行つたときなどには、

今でも時折日本語で独唱をします。日本の独唱者、音楽家、讚美歌集制作者としての名声がありますので、讚美歌集、合唱曲集、四重唱集、独唱曲集を一生懸命作るだらうし、オーガスチン・スミスのような宗教音楽を編成するでしょう。まあ、こういったことをやると思っています⁽¹⁸⁾」

このように音楽を得意にしていたオルチンの来日は、日本で音楽の仕事をする目的を持って、「ピアノの調律や組立まで稽古」した上での来日であった⁽¹⁹⁾。日曜日午後五時に神戸に入港したオルチンは七時に、一八七六年一〇月に神戸の多聞通りに創設された多聞教会の礼拝に参加し、さっそく日本語の讚美歌を歌った。

翌月曜日に大阪からカーチス宣教師がやってきてオルチンを歓迎した。夜、大阪に到着したオルチン夫妻は、堂島土佐堀裏町の梅花女学校教師館のコレビー宅に落ち着いた⁽²¹⁾。

一月八日付となっている手紙でF・A・ガーディナー宣教師は、彼女が担当している午前中の礼拝で、最初、讚美歌を歌い、女生徒の一人がオルガンを弾く、と学校の様子を述べたあと、「生徒数は現在四六人。前日に神戸に着いたオルチン夫妻が一日、先週の月曜日にここに到着した」ことを伝えている⁽²²⁾。

神戸に戻ることも考えていたオルチンであったが、大阪に着いた翌日には、梅花女学校で唱歌を教えていた。

この頃の梅花女学校について、コレビーは寄宿生が二人いて、拡大への強い意欲があると述べている⁽²³⁾。一八八一年の秋に紀伊新宮から大阪に出てきて、やがて梅花女学校入学し、一八八五年に卒業した井手睦世は、梅花女学校に来ると「見た事もないオルガンを鳴らして歌つたり祈つたりするので、オルガンの中にキリスト教の神を祭つてあるのかと思った⁽²⁴⁾」という。

そんな女学校生にオルチンが最初に教えたのは「主われを愛す⁽²⁵⁾」であった。三〇名ばかりの生徒に、日本語がよく出来ないまま英語の讚美歌を教えたが、困ることはなかったという。二、三人の生徒が代わる代わるオルチンの傍ら

に来て、教授を手伝ったからである。⁽²⁶⁾ 唱歌の通訳をして教授の手伝いしたのは、北住春子（後の山岡邦三郎夫人）や杉田しん子（後の長田時行夫人）の二人であった。⁽²⁷⁾ 歌唱を指導してみて、オルチンが最初に困ったことは、生徒が口を開けないことであった。それで彼が最初に覚えた日本語が「口を開けて」で、この日本語を「大声疾呼して教授を続けた」という。⁽²⁸⁾

同じ頃、東京の音楽取調掛では、ヒ、フ、ミという階名唱法を使って歌唱指導を行っていたが、オルチンは、ヒ、フ、ミという口を開けないで発音する母音では口が開かないので、ド、レ、ミの階名唱法を使って歌唱指導をすることにした。その様子をオルチンは、「初めの程は二三回はかう歌ふのですと口をあけて教へたが、二三人の方は袖に顔をかくして笑つてばかりゐるので、何も私は教へることが出来ませんでした」と回想している。⁽²⁹⁾

三 大阪の教会での歌唱教育の開始

船越町に講義所が開設される前年の四月三日付けの書簡で、カーチスが「私どもは、毎週いくつかの教会で歌い方を教授すべく集会を持つことを目論んでおります。多数の人びとが切に習いたがっています。オルチン氏に、当地で手伝つてほしいものであります」と述べたことは既に紹介した。同じ手紙で、彼は、「音楽の力はこの国ではまだ全然知られていません。歌はごく僅かしかありません」と日本の西洋音楽の現状を述べ、⁽³⁰⁾ しかし、キリスト教の歌は定着するだろうし、日本の感化にとつては重要なものになるだろう、という見通しを述べていた。

天満教会は、一八七九年一月一二日に「浪花教会員中天満地区の信徒が分離してできた教会で、最初は沢山保羅が兼牧した」⁽³¹⁾。その天満教会が一八八三年に開設した講義所について、六月二五日に受理された大阪ステーション報告

は次のように述べた。

「天満教会は最近新しい講義所を開いた。その講義所は官立学校の若い学生に接触するに便利な場所にある。若者を惹きつけるために音楽教室が組織され、金曜日に宣教師が教える。出席はかなりよい。若者は音楽を学び、英語を聞きたがっていることがよく分かる。日曜礼拝で聖書を英語で教え、誘っているが、あまり成功していない」⁽³²⁾

この講義所とは、二月二十七日の親睦会で開設が決定され、船越町一丁目六三番地に家を借りて開かれたもので、音楽を指導したのはオルチンであった。⁽³³⁾ 金曜日以外にも、「四〇名が日曜の午後集まり、半時間程の歌の練習、聖書研究、ディスカッションを行った」⁽³⁴⁾。

講義所の様子についてグールディは次のように述べている。

「船越町の集会に出かけた。幼児クラスを指導するかたわらで、近所の人や通行人を集めるのは私に最適の仕事です。日本の家で日曜日の午後、あなたが私たちと一緒に過ごせればどんなにいいでしょう。オルチン氏は、天満教会から来た人たち、そして一緒に畳に座りたい人なら誰とでも、一緒に歌っています」⁽³⁵⁾

不調を訴えていたカーチスの帰米許可を諮問委員会に求める決議が五月九日の日本ミッシヨンの年会で行われた。⁽³⁶⁾

カーチスは七月二日に大阪を離れ、六日にサンフランシスコに向けて横浜を発った。⁽³⁷⁾

八月六日付でオレゴン州オルバニーから出した手紙で、カーチスは一年前の天満教会が行った伊勢伝道の折の話として次のように紹介している。

「彼らは新しい讚美歌をいくつか習いたくて私の現われるのを辛抱強く待っていました。日本のような人騒がせな土地でも、私はそれほど驚くことなどなかったのですが、彼らは私どもの讚美歌を三〇曲の余も知っていて、しかも上手に、私どもの教会で歌っているのよりも数等上手に、歌うことができるのを思い知らされました。彼らは指導を

受ける機会などほとんど持たなかったというのであります。日本人はいずれは歌い手になれるのだろうかと問われる向きがありました。私は決して疑ってはおりませんが、もしそうであったとしても、これを聞いたからには納得すべきでありましょう。たしかに音楽の才があるのですから。耳も声も魂も音楽に向いています。但しおよそ磨かれていないのです。私どもは「シオンの歌」を歌って楽しい一時をすごしました。また私は彼らに新しい歌、「There is a Fountain」に Gospel Hymns の節をつけたものを教えるという楽しみを得ました。彼らはこれに魅せられ、あつという間にメロディを覚えてしまいました。―これは私どもの最新の讚美歌であります。しかし聴いた人は皆好きになります。日本の私どもの間では最もポピュラーな歌であろうと思います。もっと良いものがあり得るでしょうか？」
 (若山晴子訳)⁽³⁸⁾

カーチスが「日本の私どもの間では最もポピュラーな歌」と述べている讚美歌は、讚美歌としてだけでなく、唱歌「行けども」として、日本でも韓国でも愛唱された。また、伊勢伝道の結果、一月二日に酒井貞躬が受洗した。⁽³⁹⁾ 彼は一八八二年の大阪ステーション報告で、伊勢で受洗し天満教会の会員となった「四人のうち一人は梅花女学校の教員となり、又讚美歌作製の準備によき働きをなしている」と報告されている。⁽⁴⁰⁾

婦米していたカーチスに、一〇月二七日付でクラークから、文部省の唱歌教育を創始したL・W・メーソンの照会に関する手紙が届いたことについては、他で詳しく述べたので省略する。⁽⁴¹⁾

婦米したカーチスについてオルチンは、一月二日の手紙で、「カーチス氏は、不調をおして、私共の教会音楽を改良するために大いに働いておいででしたが、この仕事は今や殆ど全部私にかぶさってきました」と述べた。⁽⁴²⁾

続けて、「二つの教会で讚美歌を歌う練習が毎週定期的に行われています」と報告された二つの教会とは、大阪ステーション報告や宣教師書簡から推察するに、天満教会と、大阪教会の会員で南地区在住者によって一八八二年に会

衆派の四番目の教会として設立された島之内教会⁽⁴⁴⁾ではないかと考えられる。

カーチスから引き継いだ教会音楽改良の仕事が進んでいる様子をオルチンは、

「教えた分だけ彼らが礼拝で歌う讃美歌が増えていきますが、彼らにはもつと基本的な教育が必要だと思ふことがあります。そこで、大阪にある四つの教会からそれぞれ歌唱の中心になってくれる三、四人を選び、彼らを指導者クラスにまとめました。指導者クラスは、音楽の基礎を勉強するために、週に一度私の家に集まります。現在、毎週四回ほど定期的にレッスンをしています」

と、報告している⁽⁴⁵⁾。大阪にある四つの教会とは明らかに大阪(梅本町)教会(一八七四年設立)、浪花教会(一八七七年)、天満(橋)教会(一八七九年)、島之内教会(一八八二年)のことである⁽⁴⁶⁾。

大阪教会についてステーション報告書は、「大阪教会の牧師と彼の会衆である二人の若者が、子供たちのところへ出掛けて行き、話しをするのを大いに助けてくれた。ベビーオルガンは集会を運ぶのに重要な補助物である」と、子供たちがベビーオルガンで讃美歌の指導を受けた事実に触れている⁽⁴⁷⁾。

レポートが述べている大阪教会の牧師とは、同志社を卒業後、同志社女学校の幹事を勤め、一八八二年五月一二日に仮牧師に就任、翌八三年四月二〇日に新島襄から按手礼を受けた宮川経輝である⁽⁴⁸⁾。

四 大阪の教会での歌唱教育の発展

メーソンが教会音楽の普及改善を目的とした宣教師として来日するのを歓迎する意向を示した一八八四年一月の書簡で、オルチンは、日本人の音楽好きと音楽の普及の見通しについて、どの国でもキリスト教会では音楽は欠かせな

いが、日本もそうなってきた、われわれの教会はただ歌っているだけなのに、人々はドアの近くに立って耳を傾けている、それほど音楽好きな日本人なのに、よい知識を得る手段に欠けている、音楽教育に向けた国民的運動がどこかで起こるとしたら、教会以外には考えられない、というのは、東京の軍楽隊を除けば、音楽を広く一般に使用している階層はクリスチャンだけであるから、と述べた。⁽⁴⁹⁾ また、音楽は教義と同様、クリスチャンにとって欠くことのできないものであるから、教えなければならぬ、とも述べている。⁽⁵⁰⁾

五月には、持ち込まれた多くの仕事を断らなければならぬほど、日本では音楽への関心が急速に拡がっているのに、カーチスは日本に復帰するほど健康が回復していない、と音楽の急激な普及に音をあげている。⁽⁵¹⁾

また、メーソンの努力でようやく端緒についた唱歌教育に関連して、大阪の小学校が外国の音楽を教えることの出来る教師を探しているが、大阪にそんな人材がいるか分からない、公立学校の教師が音楽を教えて欲しいと来るが、宣教師はそんな仕事をするために日本に来たのではないと、一端は文部省の唱歌教育と一線を画したオルチンであったが、それから八ヶ月後には、音楽を教えることで相変わらず忙しい、抱えきれないほどたくさんの方の申込みがある、山に避暑に出掛ける直前、岡山の師範学校と幼稚園の主任音楽教師に任命されたばかりの人が、音符を教えてくれと問い合わせしてきたので、わたしは引き受けることにした、と需要の多さに妥協している。⁽⁵²⁾

教会の力による西洋音楽の浸透は、オルチンには盲人音楽家の生活問題となって現れた。音楽で生活している盲人がキリスト教に改宗すると彼らは生活の糧にしていた伝統音楽を捨てなければならない。そうすると、彼らは生活ができなくなる。この問題の解決としてオルチンが提案したのは、彼らの技量を教会が保持し、正しい分野へ向ける、というものであった。⁽⁵³⁾

彼らの技量を教会が保持する具体例を、大阪教会の記録に見ることが出来る。一八八一年四月二日にレビットの送

別会が大仁村玉藤亭で行われ、「三教会より警者二名に託し、三弦及筑紫箏を以て今様を歌はせしむ」ことが行われた⁽⁵⁵⁾。「正しい分野に向ける」とは具体的には、讃美歌の曲として「今様」を採用することであった。オルチンは八三年一月二日にクラークに宛てた書簡に、今様に讃美歌(詩)“The Morning Light is Breaking”を配した楽譜を同封している。

この年、大阪教会が一〇周年をむかえたことに関連して、教会音楽についてオルチンは、「当時、彼らは一冊の讃美歌集も持っていなかったが、今では、外国の曲が付けられた大きな日本語讃美歌集を持っている。(大阪、浪花、天満、島之内の)教会のうち、三教会がオルガンを所有し、日本人の若い女性が弾いている」と、短期間でのめざましい発展を振り返っている。⁽⁵⁶⁾

ここで讃美歌歌唱の跡を一八七七年七月一日から大阪教会の記録に拾ってみると、一八七八年二月二五日に「讚美」の文字が最初に登場し、一〇月三〇日の与力町三番に集まった親睦会で、「一同茶菓を食ひ讚美歌を歌ふて去る」とある。

一八八〇年五月二日の聖晚餐受洗三男二女に関して、「讚美而皆歌之」とあり、一八八一年二月四日、小野重吉の母が肺病で危険になり、受洗を望んだ折、「讚美歌を奏し」た後、受洗が行われた。九日の上代知新牧師の按手礼の際には、讚美歌の第二、第三、第二八が歌われ、最後に「松山氏起立し、第壹番を讚美に歌ふ事を述ぶ。衆同音に歌へり」と斉唱で歌ったと記録されている。七月四日の郡山今井町芝居小屋で催された大説教会では、二番、一四番、四七番の讚美歌が歌われている。十一月一日の記録では、「讚美歌及び祈禱中患者眠に就く」とある。

一八八二年三月九日に梅花女学校で行われたデフォレストの送別会で、「唱歌十六号」、「歌六十三号」、「英語歌」、「歌第一号」が歌われた。四月三〇日の按手礼の試験において、「歌六十六号」、「歌二十一号」、「歌五十九

号、「歌七十二号」、「歌六十六号」、「歌九十四号」、「歌第一号」、「歌二十号」の順に歌われた。⁽⁵⁷⁾

これは、九十四号までであることから、三月に出版されたカーチス編の『讚美歌并楽譜』の番号であると考え、曲名はそれぞれ「第一、Old Hundred」、「第二〇、二、Auld Lang Syne」、「第五九、Dorrance」、「第六六、Autumn」、「第七二、Venevento」、「第九四、Barimens」となる。

以上の記録からすると、最初の内、教会では、臨終、葬式、按手札といった特別な日だけに讚美歌が歌われたのであろう。

さて、六月二三日にポストンで受理された大阪ステーション報告は、

「この（島之内）教会では、歌唱を学ぶことに特別興味を持っているようである。宣教師の一人が週に一度、夜、彼らを教えている。彼らは進歩を示している。日本人は疑いなく外国の音楽を学ぶことが出来る。ただし、教師の側に多くの時間と忍耐を要するが、」

と述べている。⁽⁵⁸⁾

教会音楽に対するオルチンの働きについてクラーク書記は、三月二四日の手紙で、「出来るだけ援助するように」と述べる。⁽⁵⁹⁾ 九月一五日には、あなたが音楽の発展に立派な貢献をしていると聞いている、ただ、日本語の習得の妨げにならないように、と指示した。⁽⁶⁰⁾

これに対してオルチンは、一月二五日付の手紙で、代わりの人がいれば音楽にあまり時間を取られたくないが、学校では一週間に二クラス、自宅で一クラス、さらに、四つの教会の各々で毎週練習があるので、他の仕事をする時間がない、と答えている。⁽⁶¹⁾

同じ状況は翌一八八五年も続いた。

「第三教会（天満）の十二人の会員はカーチスとわたしが二年前に開いた市のある家で、順番に礼拝している。二年前から、毎日曜日の午後はここで讚美歌唱と聖書会のために過ごす。午前中は、第一教会（大阪）と第二教会（浪花）です。三つの教会を回るため、毎日曜日に七マイル歩いている。第四教会（島之内）は毎週金曜日夜に訪問している」⁽⁶²⁾

この年の大阪ステーション報告は教会音楽の発展について次のように述べた。

「音楽が進歩したおかげで、われわれの教会礼拝はさらに面白く、印象深いものになった。歌だけでなく、音楽の理論に対する向学心が大きくなっていて、定期的レッスンがあちこちで行われている。その結果、音楽教師を目指すものも何人か出てきた」⁽⁶³⁾

五 梅花女学校の音楽教育

一九〇一年一二月の梅花女学校同窓会誌「この花」第一号に発表された「梅花女学校教育方針」は「音楽科」の歌唱教育方針について次のように特徴を記している。

「偕て我が梅花女学校の学生は最上の方法を以て音聲を訓練せられ、花ならばまだ蕾とも云ふべき、若やかなる聲を過度に働かすことなく、唯時経て美はしき實を結ばしめんが為に、力に應じて三四の組々に分ち居れば唱歌の稽古は一般に楽しみ居る模様なり。若し年幼くして無理に強き音聲を發し唱歌せんか、往々生涯癒す能はざる病根を醸すことあり。恐れざるべけんや。されば唯美はしき自然の音聲こそ望ましかれ。我校が特に生理學上の注意を怠らずして、音楽の教授も完全を期するもの、畢竟之が為なり」⁽⁶⁴⁾

このミッションスクールらしい歌唱教育の方針は、一八九一年から一八九四年まで梅花女学校で音楽を教えたE・タレーの次の観察と合わせて理解されるべきものである。⁽⁶⁵⁾

「日本の子どもたちが歌う気を見せると、歌うことが奨励され、どこか静かな場所に連れてゆかれ、彼らは声をできるだけむちやくちやに鍛え上げることになる。彼らは叫び、それも疲れるまででなく、喉と鼻から血が吹き出るまでそうするのである。こうして、これらの器官のデリケートな血管のいくつかが破裂させられるのである。これは希な例ではなく、普通のやり方である」⁽⁶⁶⁾

梅花女学校の初期音楽教育について見ると、一八八三年六月一八日に安東文部権少書記官が梅花女学校を視察し、音楽の授業も参観し、「唱歌の如きは他校よりは稍進歩したるを見受たり」と評価した。⁽⁶⁷⁾

一〇月一日のコルビーの手紙は、「学校は今のところうまくいっています。オルチン氏は音楽を教えるのに相当の時間を割いていて、この明らかに必要な科目を一生懸命、上手に教えています」と伝え、⁽⁶⁸⁾翌月一二日のオルチンの手紙は、コルビーは女学校の音楽教育から解放され、他の仕事が出来そうだと喜んで⁽⁶⁹⁾いる、と伝えていることからすると、一〇月にはオルチンが梅花女学校の音楽教育を全面的に引き受けたようである。

梅花女学校の唱歌の試験について、翌一八八四年七月九日の「福音新報」は、七月三日の午後音楽教師オルチンによって唱歌音律の試験が行われ、「音律のドレミと文部省出来の新歌を一ツ二ツ謡はしめらる」と報道し、「この科は我邦には珍しきものにて梅花女学校のみ得たるものと思はる」と評価している。⁽⁷⁰⁾

一八八五年七月十六日の卒業式で女生徒が各パートに分かれて歌った合唱が一般に披露された。⁽⁷¹⁾七月二二日号の「福音新報」は「オーチン氏が日頃尽力にて教へられたる唱歌を二三回生徒の方のみにて歌はれしが妙にきこえし」と評価し、全学年による同じように素晴らしい歌声が聞きたいと希望を述べている。⁽⁷²⁾

この後、オルチンの指導による女生徒の演奏は、卒業式やその他の行事の際に注目を浴びたに違いない。一八八六年には、オルチンの音楽教育への貢献をドーディは、オルチン氏は親切にも、声楽、英語、器楽を教えて学校を援助している、と報告している。⁽⁷³⁾

一八八七年には生徒数が前年の九〇名から一気に二〇〇名に達し、これに対処するため、「今仮に本校近傍に一家を借授、第二寄宿舎とする」ことにした。⁽⁷⁴⁾一〇月にこの新しい建物を祝った際に、声楽と器楽二重奏が演奏され、最年少の女生徒による讚美歌「I am so glad that our Father in heaven」が手遊び歌と共に披露された。⁽⁷⁵⁾

この頃、ドーディは寄宿舎の九歳から一四、五歳までの年少者に讚美歌や手まねを入れた英語暗唱詩を教えていた。「来客でもあつた時（主に外國人で有つたと覺えて居ます）よく教師館のパラーに呼ばれて行儀よく其方々の前で藝をさせられました。お客様はマア可愛らしいよく覺えたものよとほめらるゝ度先生のお鼻は高かつたとおぼえて居ます」という。⁽⁷⁶⁾

一八八八年二月二五日の梅花女学校の創立十周年記念式で女生徒はとても上手に歌った。これはオルチンの入念な訓練のお陰であると、ミス・M・プールは報告している。⁽⁷⁷⁾

「明治十七年より同二八年まで足かけ十二年間母校に於て御厄介になりました」という豊崎はなの回想によると、この頃の梅花女学校では唱歌は、「毎水曜日の午後二時より五時まで土蔵の二階でミスターオルチンに教はりました」。トニックソルファーによつて学び、「クラスの組織は組々ではなく各學年を通じて其中より唱歌の力の優秀なるものを一の組とし、以下それに準じ五の組まで有りました」。

寄宿舎生活は讚美歌に彩られていた。「毎日午後六時から約三十分夕の集まりが有りました。（中略）讚美歌を歌ひ聖書を読み感話あり祈禱をし又讚美歌をうたつて終るのです。（中略）土曜日休日但しお琴やオルガン花のおけい

こ等はありません。 (中略) 日曜日は朝食後各々教會へ行く準備をします。 (中略) 八時頃教會行のベルがなります。その頃の大阪の組合教會は、大阪教會、浪花教會、天満教會、島之内教會でしたが島之内は遠い為か行くものもなく大抵前の三教會でした。會堂の遠さによつてベルの鳴る時間がちがいます。それをきいて聖書と讚美歌と携へ寄宿舍の庭に立ち、二列になつてゾロゾロと長く行列をして教會へ行きます。 (中略) 夕食後運動の爲室へかへらず約一時間庭であそびます。七時頃夕の集りのベルがなる。 (中略) 終つて後は外国の先生のピアノ伴奏で英語讚美歌を澤山歌ひました。一時間以上も續けてあきもせずよく歌つたものでした。 (中略) 一つの讚美歌を歌うて居る間次に自分の好きな歌を撰んで置いて終るや終らぬに大聲にて其番號をいふ、聲の大きなもの勝ちとなつて其歌をうたふ事となる」のであった。⁽⁷⁸⁾

こうして梅花女学校では音楽が盛んになり、それによつて生徒が急増すると、本国から新たな音楽教師の派遣が急務となつていったのであった。音楽教師の獲得は任地では、ミッションスクールの隆盛どころか、存廃をも左右する緊急の問題として意識されていたにもかかわらず、本国では十分な対応がすぐには取れなかつた。⁽⁷⁹⁾ そのような内情を知つてか知らずしてか、大阪川口居留地にあつた米國聖公会の照暗女学校 (St. Agnes' School) で校長として活躍していたミス・ウイリアムソンは、⁽⁸⁰⁾ 一八八九年に「組合派の学校の声楽には惚れ惚れする。京都、大阪、神戸にある彼らの四つの学校では音楽の専属教師を抱えている。時流に遅れてはならない。そうでないと、彼らは生徒を引き抜いてしまう」とまで報告したのであった。⁽⁸¹⁾

謝 辞

梅花学園資料室の遠藤トモ氏には、資料室所蔵の多くの資料を提供していただいた。オルチンを中心とした大阪ステーションの音楽教育についてこれまでより少しは具体的に描写できたとしたら、それは氏のお陰である。茂義樹氏には大阪ステーションレポートで、坂本清音氏には、*Life and Light* に掲載された婦人宣教師の書簡で、吉田亮氏には、大阪ステーションの宣教師書簡で、手代木俊一氏には、オルチン・クラーク往復書簡で、大愛お世話になった。ここに記して諸氏に感謝したい。

註

- (1) "Miss Gouldy is for the present located with the Gulicks;... Mrs. Gulick has also been teaching some in the school. She & Miss Gouldy have several women, and Mrs. Gordon has seven children—nearly all girls—which we hope is the beginning of better things among the women here." M. L. Gordon's letter to N. G. Clark, 1874.1.8. (Roll 3, 107.)
- (2) 茂義樹「大阪の初期キリスト教伝道—会衆派教会を中心して—」(堀田暁生「西口忠編『大阪川口居留地の研究』思文閣出版一九九五年)二四一—二四三頁。
- (3) "Last year when Miss Colby was taking care of Mrs. Jenks in China Mrs. Curtis not only kept on with her own teaching of music in the school, but took Miss Colby's class also." M. E. Gouldy's letter to Halsey, 1878(?). 10. 16. (Roll 30, 89.) その他「カーネン夫人が音楽を担った」といふことについては、書簡などはあつたが、ここでは「Mrs. Curtis has the musical department." M. E. Gouldy's letter to N. G. Clark, 1879. 9. 7. (Roll 3, 165.) "Mrs. Curtis teaches music," A. M. Colby's letter to N. G. Clark, 1880. 3. 26. (Roll 11, 524.)
- (4) A. J. Starkweather's letter to N. G. Clark, 1878. 10. 19. (Roll 5, 244.)
- (5) "for Otsu on the shores of Lake Biwa—some 10 miles from Kiyoto there took steamer at 12 pm—for Hikone—which

- we reached at 5.30 PM—Homma san—the pastor elect—was awaiting us at the landing with members of his flock—He was at Arima last summer—and Mrs. Curtis taught him in singing—He seemed quite disappointed that she was not of the party—He has been a student at our Kyoto School—but left there to work at Hikone last fall a very interesting young man.” W. W. Curtis’ letter to N. G. Clark, 1879. 7. 14. (Roll 2, 166.)
- (9) “We can do little good as yet in the line of teaching—but our presence seems to help our voices in guiding the singing are certainly needed and an occasional word of counsel may do good. Mrs Curtis teaching music (and also—I believe has a class in Geography) in the girl’s school which under Miss Stevens’ management is doing finely.” W. W. Curtis’ letter to N. G. Clark, 1879. 1. 2. (Roll 2, 163.)
- (7) “The Osaka Yego gakko (Eng. Lang. school) held its commencement exercises a few days ago inviting the missionaries to attend and Mrs. Curtis to provide music for the occasion this she did playing several instrumental pieces and the assistance of other singing a quartetto.” W. W. Curtis’ letter to N. G. Clark, 1879. 4. 7. (Roll 2, 165.)
- (8) “Mrs. Curtis still severely afflicted with neuralgia, but is improving I trust.” W. W. Curtis’ letter to N. G. Clark, 1880. 7. 30. (Roll 2, 170.)
- (9) 若山晴子「ウァリソム・ウァリス・カーヤス師の生涯」(秋山壽記編『複製讚美歌并楽譜解説』東京：新教出版、一九九一年)四八頁。
- (10) “We have met with a great loss, & we of this station feel doubly bereaved. No one in the station gave fairer promise of future usefulness than Mrs. Curtis, for she had such a wonderful gift in her voice about what she rest of us here.” F. A. Gardner’s letter to N. G. Clark, 1880. 10. 16. (Roll 30, 8.)
- (11) “Her gift of song has done much to make her widely known in all of our stations, and in all the region around, and her disposition to be a friend to everybody who seemed to be in any need of a friend has also done much to win affection.” W. W. Curtis’ letter to N. G. Clark, 1880. 10. 29. (Roll 11, 554.) 若山晴子‘同右’四九頁。
- (12) 「トネユ一女中」[Miss Abby Maria Colby, 1847—1917.] 女学校の音楽の授業から解放されて他の活動が出来なくなった。神戸女学院大学『複製讚美歌』研究会編『新編讚美歌』研究(新教出版、一九九九年)一一七頁。G. Allchin’s letter to N. G. Clark, 1882. 11. 14. (Roll 59, 140.)

(13) 若山晴子「明治初期讃美歌に関する史料蒐集—米国伝道会宣教師文書を見る—」(秋山憲九編『複製讃美歌并楽譜解説』東京：新教出版、一九九一年)三八頁。

(14) "Mr. Allehin's coming is very opportune and we congratulate ourselves..... for he can from the out... do good work in this way while putting his strength into the study of the language. His talent as a musician will come in good play." W. W. Curtis' letter to N. G. Clark, 1883. 3. 20. (Roll 11, 571.)

(15) 神戸女学院『新編讃美歌』研究会編「同右」一一五頁。N. G. Clark's letter to W. W. Curtis, 1882. 5. 1. (Unit 1, Reel 37.)

(16) 同右「一一五頁」"I am glad to announce to you our safe arrive in the sun-rise land. At five o'clock on Sunday afternoon (12th) we anchored off Kobe." G. Allehin's letter, *ibid.*

(17) 神戸女学院『新編讃美歌』研究会編「同右」一一六頁。

(18) Interview with Dr. George Allehin, June 5, 1930. (キーン図書館所蔵未出版タイン原稿)

(19) 「キーン師の懐舊談」(『Jの花』一九三三年七月)二七頁。

(20) 茂義樹「アメリカン・ポーツの日本伝道と教会の形成」(同志社大学人文科学研究所編『米日アメリカ宣教師—アメリカン・ポーツ宣教師書簡の研究 一八六九—一八九〇』東京：現代史料出版、一九九九年)六三頁。

(21) "On Monday morning the friends in the station called to welcome us, and Mr. Curtis came from Osaka to do the same.... Mrs. Allehin and I came to Osaka last night to see friends and examine the field and shall return to Kobe tomorrow." G. Allehin's letter, *ibid.* 「キーン氏談」(『Jの花』一九三三年)一九頁。

(22) "I am in the school two hours a day only. A half hour of this time is spent in the morning devotional exercises of which I have charge. It takes considerable time to prepare for this as I do want to be able to feed a little. First we sing a hymn, one of the girls playing the organ." "The scholars members forty-six at present.... Mr. and Mrs. Allehin came here last Mandy the 13th having arrived in Kobe the day before." F. A. Gardner's letter, 1882. 11. 8. (Roll 30, 16)

(23) "Our school has had its full number of boarders (twenty two) all winter and some of the time one and two more. There is a strong desire for enlargement." A. M. Colby's letter, 1882. 4. 16. (Roll 11, 529.)

(24) 井手睦世「其質のハニシメ」(『Jの花創立五〇年記念誌』一九二八年)一〇六頁。

- (25) 「オルチン師の懐舊談」同右。
- (26) 「オルチン氏談」同右、二〇頁。
- (27) 井手陸世、同右、一〇八頁。
- (28) 「オルチン師の懐舊談」同右、二八頁。
- (29) 「オルチン氏談」同右。
- (30) 若山晴十、前掲論文、三七頁。“The Power of music has never yet been known in this nation. There has been very little of song. But Xian song is going to have a place and a considerable one in the reformation of Japan.” W. W. Curtis' letter to N. G. Clark, 1882. 4. 3. (Roll 11, 567.)
- (31) 茂義樹「大阪初期キリスト教伝道—会衆派教会を中心として」同右、二四五頁。
- (32) “This Tennna church has recently opened a new preaching place in the city in a very desirable locality with a hope of reaching the young men in the government school. With a view to attract these young men a music class was organized for Fridays, taught by missionary. Attendance upon this has been fairly good; The young men manifesting an eagerness to learn music and also to hear English; but although the further inducement of Bible teaching in English at the Sunday Services was held out very little success has yet been attained.” Osaka Station Report, 1882-1883. (Roll 7, 29)
- (33) 「そこでは毎週三回、祈禱、聖書研究、さらには宣教師オルチンによる歌の指導が行われた。またカーチスも聖書研究を担当した」。茂義樹「明治期における会衆派の大阪伝道 明治十三年（一八八〇年）より十七年（一八八四年）まで」（『沢山保羅研究』第二巻、一九六八年）八一頁。
- (34) 同右。
- (35) “I went up to the Funna Ko shi cho meeting. No one can take my place there; for I gather in the neighbors and passers by—beside superintending the infant class. I wish you could spend a Sunday afternoon with us in that Japanese house. Mr. Allchin sings with those who come from the Tennna church and any who will sit down on the mats with them.” M. E. Gouldy's letter to Ward, 1883. 10. 20. (Roll 30, 97.)
- (36) 吉田亮「資料紹介：アメリカン・ボード議事録、年会報告(4)——一八八〇—一八五年」（一九九五年六月二三日、同志社大学入

文科学研究第三研究会(A)配布資料)一七頁。

- (37) 若山晴子「ウィリアム・ウィリス・カーティス師の生涯」同右、五三頁。
- (38) 若山晴子「明治初期讚美歌に関する史料蒐集—米国伝道会宣教師文書を見る—」同右、三八—三九頁。
- (39) 茂義樹、同右、五八頁。
- (40) 同上。“and that four persons from Ise have been received into its membership, one of whom is now a teacher in our girls' school and has also rendered much and valuable service in the preparation of the new hymn book.” Osaka Station Report 1881-1882. (Roll 6, 25.)
- (41) 安田寛「J・W・メーンンの再来日計画とアメリカン・ボート日本」(『キリスト教社会問題研究』第四四巻、一九九五年)一〇五頁以下参照。
- (42) 神戸女学院『新撰讚美歌』研究会編、同右、一一七頁。“Mr. Curtis was doing as much as his feeble health would permit to improve the music in our churches. That work has now almost entirely fallen to me.” G. Allehin's letter to N. G. Clark, 1883. 11. 12. (Roll 9, 60.)
- (43) “Two of the churches receive regular instruction every week in hymn singing.” *ibid.*
- (44) 茂義樹「大阪初期キリスト教伝道—会衆派教会を中心に—」同右、二四五頁。
- (45) “Although every new tune taught them adds to their stock of serviceable hymns yet I have felt for sometime that they needed instructions of a more permanent nature. So I selected three or four persons from each of our four churches in Osaka who are considered leaders in singing and formed them into a leader's class. This class meets at my house once a week for instruction in the principles of music. At present then, I have four regularly music lessons each week.” G. Allehin's letter, *ibid.*
- (46) 茂義樹「アメリカン・ボートの日本伝道と教会の形成」同右、八一頁。
- (47) “The pastor of the Osaka church and two young men of his fold have rendered hearty help in going over to talk to the children. A baby-organ has been an important auxiliary in carrying on the meeting.” Osaka Station Report, 1882-1883. (Roll 7, 29.)
- (48) 茂義樹「明治期における会衆派の大阪伝道 明治十三年(一八八〇年)より十七年(一八八四年)まで」同右、六六、七

- 九頁。
- (49) "You know that in any country music is indispensable to the christian churches, and it has become so already in Japan. People stand about the doors listening to the singing (such as it is) in our churches. But it is pitible to see a people so fond of music so destitute of the facilities for gaining a better knowledge of it. If there is to be any national movement towards a musical education, it must come through the churches, because the christians are the only class (with the exception perhaps of the military bands in Tokio) who have any general use for our music." G. Allchin's letter to N. G. Clark, 1884. 1. 14. (Roll 9, 61.)
- (50) "and that as we have introduced christian music with christian doctrine and made the one almost as indispensable to the christians as the other we ought to provide facilities for teaching it." *ibid.*
- (51) "Mr. Curtis does not seem to improve fast enough to return next Fall, and I am sorry to report that Mr. DeForest is not so well as he was and cannot do much work. The interest in music is growing fast in this part of Japan and I am obliged to refuse much work in this line that is brought to me." G. Allchin's letter to N. G. Clark, 1884. 5. 26. (Roll 9, 63.)
- (52) "The public schools in Osaka are looking for teachers of foreign music, but I do not know one Japanese in this large city who is able to teach. Some of the teachers come to us with the request to teach them enough music to enable them to teach their scholars—but we did not come to Japan to do such work." G. Allchin's letter, 1884. 1. 14.
- (53) "I am still busy teaching music and have many more applications to teach than I have time to give to it. Just before leaving home for the mountains a young Japanese called to ask me some questions about foreign music. He had just received an appointment as head music teacher in the Normal school and Kindergarten at Okayama. In addition to the Japanese system he wishes to teach the foreign notation. He is willing to come from Okayama to Osaka (a distance of miles) and stay four months in the city if I will teach him. I have consented to aid him a little with the hope of teaching him also a "more excellent way" before he leaves." G. Allchin's letter to N. G. Clark, 1884. 8. 23. (Roll 9, 64.)
- (54) "Again, some professional musicians who have supported themselves and families by their art have come into our

churches. One such (a blind woman) was among the member who formed the Koriyama church—and it seems to me that we ought to try to retain such skill in the church and turn it into a pure channel, thus enabling them to support themselves by their art as before." G. Allchin's letter, 1884. I. 14.

(55) 掛紙繪『古今事類考』異代文字部活字部 (海花新國寶彙編活字部) 一六六頁。

(56) "Then they had no hymn book; now they had a large selection of Japanese hymn set to foreign tunes, and three of the churches own organs that are played by native young women. Great indeed is the change in so short a time."

G. Allchin's letter, 1884. 5. 26.

(57) 掛紙繪' 振野牛輪和風繪。

(58) 掛紙繪' 振野牛輪 大川町。"Shima-no-uchi Church... This church seems to be especially interested in learning to sing and one of the missionaries is devoting one evening a week to teaching them. They are making progress and there is no doubt that the Japanese can learn foreign music, although it will require much time and patience on the part of the teacher." Osaka Station Report, 1883-1884. (Roll 7, 31.)

(59) "and assisting as you may in the matter of music." N. G. Clark's letter to G. Allchin, 1884. 3. 24. (Unit 1, Reel 40.)

(60) "I hear now and then of your valuable help in the matter of developing music. I would not have you give so much time and strength to this as to interfere with your mastering the language. That is of first moment." N. G. Clark's letter to G. Allchin, 1884. 9. 15. (Unit 1, Reel 41.)

(61) "I wish to assure you that I do not give very much of my time to music. What little I have done I have been forced into by the fact that I was able to teach music and that no other person was at liberty to do just what I am doing. Although I have two classes in the school once a week, one class at my home, and a weekly practice for each of the four churches, yet no time is taken which could be used in other work." G. Allchin's letter to N. G. Clark, 1884. 11. 25. (Roll 9, 65.)

(62) "Twelve members of this 3rd church are preaching in turn in a house in the city which was opened two years ago by Mr. Curtis and myself. Since then I have spent every Sunday afternoon in this place singing hymns and teaching a bible class. Sunday morning are given to the 1st and 2nd churches. To reach these three churches I walk about

- seven miles every Sunday. The 4th church receives a visit from me every Friday evening." G. Allehin's letter to N. G. Clark, 1885. 6. 2. (Roll 9, 66.)
- (33) "Our church services have been rendered more interesting and impressive by improved music. There is a growing desire to be taught not only the tunes, but the science of music, and regular lessons are given in many places. One result is that several persons are now looking forward to becoming musical teacher." Osaka Station Report 1884-1885. (Reel 334, 42.)
- (34) 創立六十年史編纂委員編『創立六十年史』(梅花女子専門学校、梅花高等女学校、一九三七年)五二—五三頁。
- (35) 梅花学園百年史編纂委員會編『梅花学園百年史』(梅花学園、一九八八年)資料編六六頁。
- (36) "When Japanese children show a disposition to sing, they are encourage to undertake it and are sent away into some quiet place to exercise their voices as violently as possible; they scream, not indeed until they are fatigued, but until the blood rushes from the throat and nose, they having ruptured some of the delicate vessels of these parts; this is no isolated instance, it is the usual practice." "Western Music in Japan: Interview with Miss Elizabeth Torrey." Music, November, 1898, p. 51.
- (37) 梅花学園九十年小史編纂委員會編『梅花学園九十年小史』(梅花学園、一九六八年)三二—三三頁。
- (38) "The school was... in as satisfactory a condition as it is at present.... Mr. Allehin is spending considerable time and strength in teaching music which certainly is needed and which seems to be doing him good." F. A. Gardner's letter to N. G. Clark, 1883. 10. 1. (Roll 13, 48.)
- (39) "Miss Colby was glad to be relieved of the musical instruction in the girls school that she might do other work." G. Allehin's letter to N. G. Clark, 1883. 11. 12. (Roll 9, 62.)
- (70) 梅花学園九十年小史編纂委員會編『同右』三六頁。『福音新報』二卷第二八号(一八八四年七月九日)。
- (71) "The graduation exercises of the Raikwa Jo Gakkou (Plum Blossom girl's School) took place on the 16th of July.... The monody of the reading of nine compositions was broken by the singing of choruses by the school. These had been carefully prepared by a missionary, and the girls sang different parts." A. Daughaday. "A Letter from Miss Daugherty." Life and Light, 1885. 11.

- (72) 梅花学園九十年小史編集委員会編、同右、一九六八年) 三八頁。
- (73) "Mr. Allehin has kindly assisted by teaching the vocal music, the English teaching, instrumental music," A. Daughaday's letter to N. G. Clark, 1886. 8. 18. (Roll 12, 11.)
- (74) 梅花学園百十年年鑑編集委員会編、同右、六八頁。
- (75) "In October we held a little celebration, on account of the completion of our new buildings. The exercises consisted of Japanese and English composition, singings, instrumental duets, and the recitation of English poems. One, "Curfew must not ring to-night," seemed to please very much. Our youngest scholars sang in English, "I am so glad that our Father in heaven," as well as a little action song." "A Letter from Miss Daughaday." Life and Light, 1888. 7.
- (76) 豊崎はな「若き日の思ひこ」(『この花創立五〇年記念誌』一九二八年) 一一九頁。
- (77) "You would have been interested in our exercises on the tenth anniversary of the opening of our school, Feb, 25th. The girls sang very well, thanks to the careful training of Mr. Allehin, and the English pieces were spoken with distinctness an accuracy." "Extracts from Letter from Miss Mary Poole, Osaka, May 1, 1888." Life and Light, 1888. 10.
- (78) 豊崎はな、同右、一一八一—二〇頁。
- (79) これについては、安田寛「日本ミッション伝道方針と讚美歌に関する活動」(同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師—アメリカン・ボード宣教師書簡の研究 一八六九—一八九〇』現代史料出版、一九九九年) 三八五頁以下、手代木俊一「オルチン書簡 音楽(教育)、讚美歌関連記事とその後の彼の功績について」同右、一八六頁以下参照。
- (80) 平安女学院編『平安女学院一〇〇年のあゆみ』(平安女学院、一九七五年) 一三頁。
- (81) "The singing at the Congregational school is delightful. They have a teacher for music only in each of their four school at Kyoto, Osaka and Kobe. We must keep up with the times, else they will draw the pupils." "St. Agnes' School, Osaka." Spirit of Missions, 1889, 364.